KADAI JOURNAL
NO. 200
2015 WINTER

鹿大ジャーナル

鹿大広報

鹿児島大学が発信する最先端情報マガジン

https://www.kagoshima-u.ac.jp/

特集
鹿児島大学 地域にイノベーションを創出する「知の拠点」へ向けて

08 潜入ルポ ～学びの部屋～
医療を通じて地域に貢献する！
大学院医歯学総合研究科　大脇 哲洋 教授

10 先輩からのメッセージ
OB: 弁護士法人 鹿児島中央法律事務所 弁護士　本田 貴志 さん
OG: 薩摩川内市立 川内小学校 教諭　日高 碧 さん

12 研究室からSCHOLAR INTERVIEW
「体ほぐし、心ほぐし」を取り入れた音楽指導
教育学部　日吉 武 教授
次代を担う子どもたちの安全な誕生のために
医学部保健学科　吉留 厚子 教授

16 鹿大トピックス
鹿児島大学COC事業教育研究成果報告会を開催 ほか

19 進め！鹿大生
大学生の視点とセンスを生かして、地域に新しい風を！
教育学部生涯教育総合課程4年生 山下 慶 さん

さっつんが行く！
鹿児島大学附属図書館 中央図書館

特集

鹿児島大学 地域にイノベーションを創出する「知の拠点」へ向けて

～地域貢献マインドを持ちグローバルに活躍する人材を輩出する地方大学の使命～

鹿児島大学長
前田 芳實（まえだ よしざね）

国立大学の法人化から12年を迎えた今年6月、来年度から実施される第3期中期目標・計画の素案が作成されました。この機に、本学に対する社会からの理解を一段と増進するため、鹿児島大学前田芳實学長と鹿児島大学の経営協議会外部委員であり、鹿児島の経済界を牽引する城山観光株式会社取締役会長の伊牟田均氏との対談が行われました。

自主自立と進取の精神を尊重し、地域の発展に貢献する総合大学へ

中島　まず本学の理念と基本目標について前田学長よりお願いします。

前田　鹿児島大学は「自主自立と進取の精神を尊重し、社会の発展に貢献する総合大学をめざす」ことを謳った「大学憲章」を平成19年に制定しました。これは本学の羅針盤とも言える行動指針で、とくに教育においては「高い倫理性と社会性を備え、向上心を持って自ら困難に立ち向かい、国際社会で活躍できる人材の育成」を掲げています。

「進取の精神」を学生教育に具現化すべく、本学学生の行動指針や規範となる「鹿児島大学学生憲章」を平成22年に制定しました。この学生憲章は、全学部から推薦された学生が参加する「学生憲章ワークショップ」や「学生憲章成案作成委員会」が草案の作成や検討に当たるなど、学生自らの手で策定した全国の国立大学では初めての憲章です。鹿児島大学は、進取の精神を有する学生を育成して、地域とともに発展する知の拠点として、「進取の気風にあふれる総合大学」を目指しているところです。

中島　そうした本学の理念や基本目標を踏まえた上で、今年6月に第3

鹿児島大学経営協議会外部委員
城山観光株式会社取締役会長
伊牟田（いむた） 均（ひとし）

期中期目標・計画の素案が策定されたわけですが、この中期目標期間に当たる平成28年度から平成33年度までの6年間における本学のあり方や目標についてお話しいただけますか。

前田　大きく4つの柱を立てています。地域活性化の中核拠点として、「グローバルな視点を有する地域人材育成の強化」、「本学の強みと特色を活かした学術研究の推進」、「地域ニーズに応じた社会人教育や地域連携の推進」、「機能強化に向けた教育研究組織体制の整備」です。これらを基本目標として中期目標、中期計画を作成しています。根底に流れるものは、自ら困難な課題に果敢に挑戦する「進取の精神」を有する人材育成ならびに「進取の気風」にあふれる総合大学にふさわしい大学改革の実施です。

運営費交付金削減による教育・研究の質の低下を防ぐために

中島　国立大学における運営の基盤的な予算となる運営費交付金は平成16年度の法人化以降、この11年間で大幅に縮小される状況が続いており、教育や研究の質的低下が懸念される状況にあります。

前田　限られた財源の中で大学を運営していたためには、国立大学がそれぞれの強みや特色を最大限に生かし、自ら改善・発展する仕組みを構築する必要があります。また、経費の節減や効率化、学内資源の再配分や多様な財源の受け入れ、また本学独自の「鹿大『進取の精神』支援基金」の創設なども進めているところです。

中島　予算状況がきびしくなる中で、限られた予算をどのように有効に活用していくべきか、伊牟田会長のお考えをお聞かせください。

伊牟田　1つは改革です。徹底的な見直しによって無駄な経費の削減と効率化について模索し、改革していく必要がある。そして2つ目は、稼ぐ力。地域性を生かした魅力ある大学づくりをすることによって学生を増やすこと。大学病院の稼ぐ力も大事です。将来的にはインキュベーションの投資によって得られたものを売却するとか上場に向けて収益事業を図るとか。そういったことにつながる研究開発を進めていく必要があると思います。そして最後に支援です。多様化した支援金をどのように集めていくかということも問われていくと思います。

地場産業と地元国立大学のかかわり

中島　次に、地域社会、とりわけ地場産業と地元国立大学の関わりについてお話を伺いたいと思います。人口減少

が進む中、大学として魅力を高め、競争力をつけるための取り組みについて、企業経営者として伊牟田会長はどのようにお考えでしょうか？

伊牟田　統計によると、鹿児島県の人口がいま170万人ですが30年後には130万人になり、40万人減ると言われています。（国民）1人が消費する金額は年間120万円から125万円と総務省が出していますが、単純計算すると30年後は現在の水準から5000億円くらい消費が減るわけです。

　このように人口と消費が減るということを考えると、今後、交流人口をいかに増やすかということが大きな課題ではないかと思います。鹿児島の地域に魅力があれば、県外、外国からもお客様が来る、あるいは県外からの学生や留学生も増えると思います。交流人口を増やすには、ビジネスもそうですが、観光がポイントになる。農林水産業と組み合わせる、あるいは医療と組み合わせる医療ツーリズムもあります。そのあたりが鹿児島の特色だと思いますので、そういうところとの産官学民連携を生かした地域づくりに鹿児島大学がどのように貢献していくかというところが大きな課題ではないかと思います。

中島　地域として交流人口の増加を図るべきというお話ですが、その点に関して、大学としてはどのように対応できるとお考えでしょうか？

前田　鹿児島県は南北600kmと広い地域にわたっていますので、まず地域の特色を生かした人づくりが大切だと思います。その地域で盛んな産業を支える人材を育てるということです。それから、いま伊牟田会長のお話にあったように、外国からの来県者を増やすということも1つの方法でしょう。そのために大学としては、グローバルな視点を持った学生を育てるということが非常に大切だと思います。

　第3は大学の持っている研究のシーズをできるだけ地場産業に生かしていくということ。地域ニーズに応じた社会人教育や地域連携の推進も必要です。現在、鹿児島大学ではかごしまルネッサンスアカデミーで、社会人向けの授業を行っており、「焼酎マイスター養成コース」のほか、「林業生産専門技術者養成プログラム」、「稲盛経営哲学プログラム」といった地域に根ざした社会人教育、リカレント教育を行っています。これからもそういう面を大いに進める必要があると思っています。

　研究面では、島嶼（とうしょ）がますます脚光を浴びる時代です。島嶼に関わる自然の研究、生物多様性の研究を盛んに行い、鹿児島という地域についても高い学術的価値を持たせる必要があろうと思っています。また地域に昔からある風土病やウイルス病の研究など医療面においても鹿児島大学は国際的に高く評価されていますので、そういう研究もこれから推し進めていく必要があると思います。

イノベーション創出と国立大学の役割

中島　諸外国では、イノベーション創出における大学の重要性が認識されていて、国際競争力の強化のためにも積極的に取り組んでいると言われています。イノベーション創出のためには、優秀な人材の育成が欠かせませんが、そこにも大学の役割が大きいのではないかと思います。

前田　イノベーション創出に向けて学内でも改革を進めています。理工学研究科では、大学院の改組を行い、新しい教育体系を作っています。農

前田芳實（まえだ・よしざね）
鹿児島大学長

昭和44年3月鹿児島大学大学院農学研究科修了（昭和52年3月 農学博士取得（九州大学））。同年3月 鹿児島大学助手農学部。昭和53年9月 アメリカ合衆国ジョージア大学 Research Associate（～昭和54年9月）。昭和56年10月鹿児島大学助教授農学部。平成6年7月鹿児島大学教授農学部（～平成21年3月）。平成10年6月アメリカ合衆国ミシガン州立大学 Visiting Professor（～平成10年11月）。平成18年4月鹿児島大学農学部長（～平成21年3月）。平成18年4月国立大学法人鹿児島大学教育研究評議会評議員。平成21年4月国立大学法人鹿児島大学理事（～平成25年3月）。平成25年4月国立大学法人鹿児島大学長（～現在）

学部でも従来と違う形の教育体系を整え、改革を進めています。

また、地域の課題を解決するため、大学全体として、共通教育から卒業までに、地域貢献マインド、すなわち地域に貢献する姿勢を持った人材を育成するための教育プログラムを進めつつありますので、地域に大いに貢献する学生がこれまで以上に増えてくることを期待しています。

伊牟田 地域に貢献できる人材を育てるということは大事だと思います。ただ、人口減少、運営費交付金の減少など、いま地方はどこもきびしい環境ですので、地方大学は競争の時代に入ってくると思います。

ですから、いかに個性化するかがポイントではないかと思っています。鹿児島は景観や歴史・文化、温泉等、観光面でも非常に資源が豊富です。食については農業・畜産業・漁業ともトップクラスで品質が高いし、大学の医療水準も高い。こういうところを融合して、産官学民で連携しながらいかに特色のある大学を作るか、いかに地域に貢献できる人材を育てるか、それが鹿児島大学にとって一番重要ではないかと思います。

前田 鹿児島大学では、島嶼、環境、食と健康、それから水とエネルギーという全学横断の相互研究を行っていて、いずれも観光ともつながるようなテーマでもあります。とくに農学部、水産学部、共同獣医学部という食料の生産に密接に関わる分野が、他大学に比べ随分層が厚いと言えます。全国でもトップクラスの質の良い食料品を生産している県ですので、食料という観点から本学は新しいイノベーションを創出することができるのではないかと思っています。

伊牟田 農業、農生産品には非常に競争力がありますから、素材を輸出するだけではなく、付加価値をつけて製品化する、6次産業化して価値を高めて販売するなど鹿児島大学としての総合力を集約すれば、いい循環が生まれるでしょうね。

グローバル企業が大学に求める人材像と大学の取り組み

中島 企業経営者として鹿児島大学にはどのような人材を育ててもらいたいとお考えでしょうか。

伊牟田 まずは地域のことをよく知るということ。鹿児島にはたくさんの魅力があるのに、意外と知らないという学生もいます。日本人学生だけではなく留学生も含めて、鹿児島の魅力、地域のことを勉強することがきわめて大事じゃないでしょうか。そういうバックグラウンドの上に立ってインターナショナルで通用する人材を育てるということです。私の経験からも自分のエリア、地場のことをよく知って、それをアピールできないと外国人には評価されません。特に地域的にも鹿児島は中国、台湾、香港等、東南アジアに一番近いところなので、ローカルを知ってグローバルな行動ができる人材が今後非常に重要になると思います。

前田 いま伊牟田会長がお話しされたことは、地域のことをまずしっかり学ぶということ、さらにそれをグローバルに展開できるという2つの面を備えた学生が必要だということですね。たしかにその通りだと思います。

鹿児島大学では、グローバル社会を牽引する学生の育成についても、いろいろなプログラムが用意されています。大学の国際開放度を高めるための独創的で質の高いグローバル教育です。具体的な例としては海外研修です。昨年は28のプログラムがあり、さまざまなテーマのもと

伊牟田均（いむた・ひとし）
鹿児島大学経営協議会外部委員
城山観光株式会社取締役会長

昭和45年鹿児島大学法文学部経済学科卒業。同年野村證券入社。本社国際金融部長、ノムラ・シンガポール取締役社長、日本合同ファイナンス（現・ジャフコ）専務取締役、野村・中国投資副社長などを経て平成20年6月城山観光代表取締役副社長。平成21年4月城山観光代表取締役社長。平成27年6月より現職

5名〜20名程度の学生がグループで世界各地に出かけます。

学生たちは、短期間ですが濃密な実習を行うことによって、現地の実情や課題、魅力を知るだけでなく、日本の素晴らしさ、あるいは日本についていかに知らないかということを知るきっかけになっています。研修の後は、語学や地域文化を勉強するなど、学生の姿勢に大きな変化が現れています。本学としては、こういう展開をこれから一層進めていきたいと思っています。

伊牟田　28ものプログラムがあるんですか。年間何名くらいが海外に？

前田　学生は250名くらいで、教員が引率して行きます。学生に対しては大学から旅費の補助が支給されています。期間は短いもので1週間から10日。だいたい夏休み、あるいは冬休みの期間に実施しています。引率の先生には熱心な先生が多くて、学長としても大変助かっています。

大学院の国際化については、一例として熱帯水産学国際連携プログラムがあります。本学の水産学部が基幹校となり、フィリピン、タイ、インドネシア、マレーシアの水産系の学校と連携し、新しい教育を始めています。

さらに平成28年度からは、※国際バカロレアの教育を受けた受験生を募集する予定です。多様な学生を受け入れるという点でも大学として非常に期待しています。

※国際バカロレア　国際的な大学入学資格「国際バカロレア資格」取得者を対象にした入試

熱帯水産学国際連携プログラムの様子

コミュニティを支える人材を育てる

中島　地域貢献への取り組みとともにコミュニティを支える人材を育成することが大学として今後一層求められるのではないかと思います。全国比でも急速に少子高齢化、過疎化が進んでいる鹿児島の地域、社会にとって、今後どのような人材が必要か、伊牟田会長のお考えをお聞かせください。

伊牟田　まずは学生諸君が地域に入ってコミュニケーションを図り、何が問題かを見つけ、それをどう解決していくか考えるということが今後さらに重要になってくるでしょう。

中島　コミュニティに入り、そこの一員となって考えるということですね。

伊牟田　ええ。そこが大事ではないでしょうか。そうすることで、若い学生のいろいろなアイディアが出てくると思うんです。地域と交わると同時に観光関係の会社・業界、あるいは農林水産物の加工会社など、地域のビジネスとも交流していく。そういうところから新しいヒントが出てくるのではないかと思います。

前田　地域の中に入っていくという現場体験には非常に大きな意義がありますね。地域では、空き家、廃校、過疎化などいろんな問題がありますよね。そういう社会的な問題、あるいは6次産業化への取り組みなどは、鹿児島大学が今から実施しようとしている地域マインドの教育プログラムと密接に連携することですので、それぞれの担当の先生と検討していきたいと思っています。

伊牟田　そうすれば、鹿児島大学はもっと地域の頼りになって、みんなのサポートを受け、勝ち残る地方大学になっていくのではないかと思います。地域の強み、特性もあるし、地理的に東南アジアなど南の国々にも開けていますから、最高の大学だと思います。

前田　鹿児島大学の卒業生の約4割が鹿児島県内に就職していますが、将来的にはこれをもっと増やす必要があると思っています。そのためには、商工会議所をはじめとする各種経済団体と卒業生の出会いの機会を密にする必要があります。いままでそこが希薄で、われわれとしても努力不足だったと思いますので、今後、キャリア形成や就職支援の面でご教示いただきたいです。

伊牟田　それは大事ですね。これからの日本は、海外からの観光客、ビジネスマン、留学生に期待するところが増えると思うんです。そういう人たちに鹿児島のことを理解してもらい、体験してもらう取り組みが大事だと思います。

私は最近、留学生にレクチャーを始めました。城山観光ホテルに来てもらい講演し、鹿児島の地域のことや観光のことなどを勉強してもらって鹿児島の良さを知ってもらう。将来、鹿児島や九州に就職するかもしれないし、母国に帰っても、鹿児島のことを口コミで広げてくれると思うんです。ですから地域、会社と留学生との交流も今後トレンドとして大事だと思います。

前田　留学生を地元に残してほしいという声は、鹿児島県工業倶楽部の会合や商工会議所の方々からもよく聞きます。大学としても、留学生が地元に残れるように努力していきたいと思っています。経済界の方々も、留学生を鹿児島に残すのはいいことだというPRをしていただけたらと思います。

中島　いま鹿児島大学に来ている留学生は約280人で、そのうちおよそ8割はアジア地域からの留学生です。この留学生は、鹿児島大学だけでなく鹿児島という地域にとっても大きな財産になる可能性がありますね。

伊牟田　城山観光ホテルでは中国、台湾、韓国を中心に10人の外国人が働いています。ビジネス、観光で来られる外国の方も増えていますから、そうしたお客様をサポートするのに非常に大事な人材です。観光業に限らず農林水産業でもそのようになっていくと思います。

現場体験と基礎力を積み重ね、世界へ打って出る気概を！

中島　最後になりましたが、鹿児島大学の先輩として、後輩へ向けてのメッセージをお願いします。

伊牟田　今の学生達は少子化のため過保護に育っていると感じていましたが、今日のお話では28の海外研修プログラムがあり、多くの学生が外へ出ていくということでしたね。やはり地元のことをよく勉強して、世界へ出ていこう、やってやろう、という気概を持った学生であってほしいと思います。

それから、僕らの時の経済学はマルクス経済学でしたが、やはりマルクスやケインズの経済学とか、アダム・スミスの本を読むとか、ベースとして古典的な勉強も必要です。その上で地域のことも勉強して、グローバルに外へ出ていくということ。それが、ひいては鹿児島、九州という地域に貢献する。そういった学生になってほしいし、大学になってほしいと思います。

中島　前田学長も鹿児島大学出身ということで、後輩へ向けてのメッセージをお願いします。

前田　私は、若い時に現場体験をするのが非常に大切だと思っています。自分のことを言って恐縮ですけれども私は農業のことを何も知らずに農学部に入学したことが、大きなコンプレックスでした。それで1年の夏休みに自分で実習先を探し、徳之島のサトウキビ農場に実習に行った経験があります。それは今でも非常に良い経験として残っています。ですから、学生にはなんでもいいから現場を体験してほしいという思いが強いです。理論も必要ですけど、まず現場を知ってはじめて理論が生きてくる。自分の体験からそういう思いがあります。

中島　本日は大変貴重なお話をありがとうございました。

進行
中島大輔
（なかじま・だいすけ）
鹿児島大学 学長補佐（広報担当）

潜入ルポ

～学びの部屋～

医療を通じて地域に貢献する！

Lecture of the University

↑人体は不思議がいっぱい

「健康を創り、守る」（共通教育科目）

大学院医歯学総合研究科（医歯学域医学系）
国際島嶼医療学講座
地域医療学分野教授
大脇 哲洋 先生

「皮膚と健康」「身近な精神疾患」「離島における健康問題」「健康を守る食事」など多岐にわたる病気の予防や治療などについて、医学部臨床各科の専門の先生たちから直接聞くことができるのがこの授業。シラバスを見ると、健康や医療に関わる興味深いコンテンツが勢ぞろいしている。全ての講義を受けると百科事典レベルの知識量になるそうで、とくに医学に関する予備知識がなくても受講できることもあり、理系文系問わず共通教育の中で人気の高い科目の一つだ。全15回の講義の初回、地域医療学分野の専門家である大脇先生の「今求められる地域医療～現状と展望～」に潜入し授業を聴いた。

人の人生に寄り添う地域医療の必要性

ほぼ満席状態の学生を前に、大脇先生はプロジェクターを使い、医療の現状から話し始めた。「肝臓ガン術後の死亡率が10％近くになったことで群馬大学が批判を浴びたことがありましたね。死亡率は平均1％あまりと言われていますが、これは日本での話。アメリカやヨーロッパではこの5倍から10倍です」。だれもが最先端の医療を受けることができる日本の保険医療制度や外国の例などが解説される。多岐にわたる分野を含む医療を理解するには、社会学的視点を学ぶことも必要なのだ。

地域医療学の教鞭をとるとともに、地域医療支援センター長を務める大脇先生。「大学病院で診る患者さんは、重症で特殊なケース。だから地域医療をしっかり学ぶ必要があるのです」。地域医療の重要性を学生に説く。「地域医療は、住民の需要にこたえて、その人の人生に寄り添った治療が大切です」。その人を仕事や家庭、人生から切り離す治療は意味がないということだ。続いて、離島に住む男性の平均寿命は他地域に比べて短く、都会と地方には大きな経済格差があることがデータで示される。「地理的にも遠く、現金収入も少ない離島では、地域で治療が完結した方がいい。ですが、一つの地域にたくさんの医師を配置することはできないので、多くの疾患を理解する医師が必要になってくるのです」と、救急救命センターやドクターヘリと並び、総合医が求められている現状。そして、すでに始まっている総合医育成への取り組みについて語られた。

生活者自身も医療について考えてほしい

人口の減少が進み、国家予算が逼迫する現在、すべての人に医療の問題点を考えてほしいと大脇先生は言う。学生への講義以外にも各地の医療人、地域民らを対象にこのような医療の現状を講演する機会も多い。「現在の医療が抱える構造的問題を広く伝えるのは、大学にいる私たちの使命だと思うんです」

講義では、国の医療政策に基づいて全国、そして県内で進められた救急救命センターの整備やドクターヘリの導入に関する経緯について語られた後、奄美大島の南に位置する小さな離島、与路島の写真が映し出された。県内離島の現状を調査研究するため、学生とともに行う研修時の一コマだ。ハブを打ち払う「用心棒」の解説を聞いていると、先生が離島へ注ぐ温かな視点が窺い知れた。

感動できる人であってほしい

講義の締めくくりに元横綱・朝青龍の2枚の写真が映し出された。「みなさん、いまから自分がどれだけ変われると思いますか？」と先生は学生たちに問いかける。「高校3年生の頃の朝青龍が、5、6年でこんなふうに変わった。まるで別人ですよね。ひとは変われるんです。ある教科が不得意だとしたら、それはマイナスではなく、チャンスだと思って勉強してください。進化する意志を持ち続けてください」と結んだ。大事なのは、体験して感動すること、そしていつでも感動できる素養を自ら創ることだという。「感動する心があれば、仕事も楽しくなるし、新しい発見もできる。感動体験を重ね、人間の幅を広げて地域医療に貢献する人が育ってほしい」。学生へ伝えたい大脇先生の思いだ。

Profile

大脇 哲洋（おおわき・てつひろ）教授

鹿児島大学医学部 1989年3月卒業、医学博士・鹿児島大学・2001年2月
[所属学会] 日本外科学会、日本消化器外科学会、日本食道学会、日本消化器内視鏡学会、日本臨床外科学会、日本乳癌学会、日本外科感染症学会、日本乳癌検診学会、日本癌治療学会、日本プライマリ・ケア連合学会、日本医学教育学会、日本静脈経腸栄養学会、日本胸部外科学会
[専門分野] 地域医療学、家庭医療、消化器外科、乳腺内分泌外科、内視鏡外科、臨床栄養、リスクマネージメント、離島医療
[研究テーマ] ○地域医療のありかた○血管内皮細胞と癌転移 ○活性酸素と免疫能 ○食道癌の超音波内視鏡診断と術式 ○甲状腺の内視鏡下手術の工夫 ○センチネルリンパ節の意義 ○内視鏡下乳房切除術の工夫 ○MRSA感染のコントロール ○リスクマネージメント ○手術環境

OB

弁護士法人 鹿児島中央法律事務所
弁護士　本田 貴志（ほんだ たかし）

熊本市出身。2004年3月鹿児島大学法文学部法政策学科卒業。同年4月鹿児島大学司法政策研究科法曹実務専攻入学。2007年3月卒業。同年11月最高裁判所司法研修所司法修習生。2008年12月弁護士法人鹿児島中央法律事務所入所。

OB OG Interview **01**

不安を拭うように勉強に没頭した日々がいま糧に。
自分が決めた夢には、迷わず進んでほしい。

司法試験を意識して勉強に身を入れ始めたのは大学3年生くらいからです。ゼミでは民事訴訟法を学び、その後3年間はロースクール（法科大学院。現在は募集停止）でみっちり勉強しました。私の周囲には大学院に進む学生は少なく、学部を卒業し就職していく友達の姿を見ると、置いていかれるような気がして、将来への不安を拭い去るように勉強に没頭していました。とくに院に上がってからは毎日15～16時間勉強していたでしょうか。ひたすら基本書を読み込むという地道な勉強を続けていました。結果として運良く一回の受験で合格したので幸いでしたが、あの頃の努力は自分の中の大きな糧になっているような気がします。

弁護士の所へ来る方の大半は、つらい出来事や苦しい経験をされている人です。「社会生活上の医師」と弁護士が言われる所以です。適切な対処法やアドバイスを伝えることは言うまでもなく、依頼者とコミュニケーションをとり、気持ちを受け止めるのも私たちの役割です。そういった意味で、学生時代には勉強だけではなく、いろんな経験を積み重ねて人間性を磨くことも大事だと思います。鹿大で多くの友人、恩師に出会い、切磋琢磨させていただいた経験はいま生きています。

少し先を歩く者として学生さんに伝えたいことは、自分で決めた夢があれば迷わず進んでほしい、ということです。失敗を恐れて行動しなかったり、迷ったりしていると、何事も中途半端に終わってしまいます。決めたことは何であれ、とことん取り組んでみてください。

OG

薩摩川内市立 川内小学校
教諭　日髙　碧（ひだか あおい）

霧島市出身。2008年3月鹿児島大学教育学部教員養成課程理科専修卒業。鹿児島市立科学館、鹿児島市立清和小学校勤務を経て現職。

OB OG Interview **02**

いろいろな体験の場を広げていただいた大学時代、本や座学だけでは学べない事を吸収することができました。

小学2年生の時の先生が大好きで、教員になることを子どもの頃から決めていました。鹿大では、1年生の時から地域の社会活動や学校の授業など実際の教育現場に参加できる機会に恵まれ、楽しみながらも小さい頃からの夢である教職がさらに魅力的になってきました。専門に上がってからも、ゼミ担当の土田理先生（現学部長）は、私たちが自ら体験できる場をたくさん準備してくださり、自発的に学びたくなる環境を作ってくださいました。教育実習のほか、奄美大島や大分県の無垢島の小規模校での参観授業など多くの現場体験の機会をいただき、本や座学だけでは学べないものを吸収することができました。

その自分の体験からも、私の専門である理科の授業を通して、学ぶことの楽しさを子どもたちに伝えたいと思っています。理科はものづくりができる学問です。ものを作る時は、勉強が苦手な子でも活躍できる場面があります。それが自信になって、勉強が好きになることもあります。その子の将来を変える可能性のあるきっかけが作れるかもしれないと思うとワクワクします。

私は社会人になってからあちこち旅行へ出かけるようになり、子どもたちに旅の体験を話したり、写真を見せたりしていますが、学生時代にもっといろんな経験をしていたら、いま子どもたちにもっと深いことを伝えられたんじゃないかなと思うことがあります。学生の皆さんは、どんどん外へ出て、自分の世界を広げてほしいと思います。

研究室から

SCHOLAR INTERVIEW

「体ほぐし、心ほぐし」を取り入れた音楽指導を通じ、幅広い音楽文化を支える土壌を耕していきたい。

中学校の音楽の先生だった日吉先生が日々の音楽教育のなかで得た気づきと体験、さらに古武術や身体論などを融合させて編み出した音楽指導メソッドが「体ほぐし、心ほぐし」。その誕生までの道のりと「ほぐし」を通じて伝えたいことについて、日吉先生に伺った。

金賞はとったものの

ある日の夕方。附属中学校合唱部のメンバーを日吉先生が指導する風景を覗いた。練習が始まり、音を合わせる生徒たちに先生の声が飛んだ。「ちょっとストップ。姿勢は…オードリーの春日。口角は、ハロウインのかぼちゃね」。イラストや写真を掲げながら指導する先生に、生徒たちは声を上げて笑い、一気に空気が和んだ。胸を張り、口角を上げて歌いだしたみんなの声は、さっきまでより明るく、張りが出ていた。日吉先生の提唱する「体ほぐし、心ほぐし」の指導方法だ。

大学院で音楽教育を学んだ後、神奈川県内の中学校で音楽を教えていた日吉先生。初任校では、吹奏楽部の顧問として指導に熱中。2校目に赴任した年、3年生の選択音楽授業を指導しコンクールに参加したところ、いきなり全国大会に進出した。それまで合唱の指導法は正式に学んだこともなく、自分流の指導を行っていたため、全国レベルに向けての指導が何もできなかった。当然ながら、入賞は逸し、それを機に日吉先生の心に火がついた。

アニメキャラクターの降臨

「最初は、一般的な指導法の本を買ってきて読みまくりました」。そういった勉強を重ねる一方で、教育現場では、日々、生徒を指導する必要がある。「本に書いてある難しいことを、どうやったら楽しく、わかりやすく子どもたちに伝えられるだろうか、といつも考えていました。そんなある日の音楽の時間。「息を大きく吐いて、と伝えるためにはトトロだ、と思いついたんです」。試したところ、生徒たちには大ウケで、イメージが伝わったことを実感。それ以来、たとえば「喉を太く感じる→喉だけメタボ」「息を少しずつ使う→シャボン玉」「息は腰に溜めるイメージ→リュックサック」など、指

Scholar Interview

日吉 武 教授

教育学部音楽専修
大学院教育学研究科
（法文教育学域教育学系）

Profile 日吉　武（ひよし　たけし）
横浜国立大学大学院教育学研究科音楽教育専攻 1991 年 3 月修了。
修士（教育学）・横浜国立大学・1991 年 3 月
■所属学会：日本音楽教育学会、全九州大学音楽学会、全国大学音楽教育学会
■専門分野：音楽教育、ピアノ、伴奏法
■研究テーマ：○音楽科教育の方法 ○息づかいと音楽教育 ○合唱指導法 ○ピアノ教育

導内容にあわせてキャラクターや芸能人、身近な道具など「〝たとえ〟を使った動機付け」の方法と身体のストレッチや古武術などを合わせた指導法を編み出してきた。

「キャラクターや芸能人などみんなが知っている言葉を用いることで、教える側と教えられる側が共通理解できる言語ができるわけです。覚えやすくて忘れにくい、教師も短い言葉で指示しやすい。しかも、クスッと笑える楽しい内容であれば心もほぐれます」

人生を豊かにする音楽文化を育てたい

「楽しい、笑う」という言葉をしばしば口にする教育者、日吉先生の眼差しはあたたかい。「体ほぐし、心ほぐし」の先にある目的も「音楽嫌いをなくすこと」と言う。「音楽を嫌いな人に、音楽を好きになって、と言うのはおこがましくて、押し付けがましい。嫌いなものを食べろ、というようなものです」。だから、音楽が苦手であっても、わかりやすく、ちょっとずつできるようになる方法が大事になるのだ。「一つずつやっていくと、必ず歌えるようになる。できるようになると自信がついて、いつの間にか音楽嫌いがなくなっていくんです」

合唱や合奏を行うことは、集団活動の価値を理解することになる。また、幅広い音楽を受け入れることは、異文化や他宗教などを受け入れる度量や包容力にもつながると先生は語る。「耳慣れない宗教音楽や他国の民族音楽であっても、まずは聞いてみようという、思いやりのある聴衆としての態度をはぐくむことは大事ですよね。それが成熟した音楽文化だと思います」。そんな思いを胸に、大学の授業のほかにも県内外の学校現場や教職員への研修会などを駆け回り、体と心をほぐす活動を続けている日吉先生である。

研究室から

SCHOLAR INTERVIEW

次代を担う子どもたちの安全な誕生のために―離島における母子保健と周産期医療の充実をめざして。

鹿児島県内では28の有人離島のうち、出産施設があるのは5島のみ。23の島では島外での出産を余儀なくされている状況だ。子宝を授かったにもかかわらず、経済的・心理的負担を抱えざるを得ない離島暮らしのきびしい現実もあるという。あまり関心が向けられることのなかった離島の出産事情について明らかにし、母子保健と周産期医療の充実に力を入れる吉留先生の活動について伺った。

きっかけは種子島

鹿児島県の離島の出産環境に吉留先生が関心を抱いたのは、大分看護科学大学から鹿大へ赴任して2年目の2007年。種子島で唯一の産科医院が閉院するというニュースがきっかけだった。「種子島に限らず、医師不足についてはクローズアップされることもありますが、助産師のことはほとんど報道されない。種子島の実態はどうなっているんだろうと思って」自ら種子島へ渡った。「調査をして驚きました。たった1人の助産師さんが年間240人ほどのお産をこなしていました。通常考えられる4～5倍にあたる人数を抱えていたんです」。すぐに地元新聞社に連絡し、それがきっかけとなり、離島での助産師不足の実情が大きく報道された。吉留先生自身、それまで取り組んでいた乳房の研究がひと段落したこともあり、この出来事を契機として、鹿児島県内離島の母子保健と周産期医療についての調査と啓発に活動をシフトしていった。「赤ちゃんが生まれる前からアフターケアまで、母子に寄り添うのが助産師や保健師。妊産婦の心身を支える大切な存在なのですが、社会的にあまり関心を向けられることがなかったこともあり、とくに地方の人材不足は深刻なのです」。人手が足りないため勤務が過酷になり、さらに人材が集まらないという悪循環になっているのだ。

マイナスもプラスになる

種子島をきっかけに、吉留先生は県内ほとんどの離島に足を運び、地域の実情をつぶさに調査してきた。その過程を通して、離島にあるのはマイナスだけではないことに気づいたという。「自然も人もおおらか。母乳の出はいい。人と人のつながりもまだ濃い。離島のコミュニティには学ぶべきものもたくさんあります」。とりわけ興

Scholar Interview

医学部保健学科看護学専攻
母性・小児看護学講座
（医歯学域系医学系）

吉留　厚子　教授

Profile　吉留　厚子（よしどめ　あつこ）
東京大学大学院医学系研究科修士課程 健康科学・看護学専攻1997年3月修了。保健学修士・東京大学・1997年3月
■所属学会：日本母性衛生学会、日本助産学会、日本看護研究学会、日本栄養改善学会、熊本県母性衛生学会、海外渡航者の健康を考える会、日本社会医学会
■専門分野：母性看護学、助産学
■研究テーマ：○母乳哺育に関する研究 ○望まない妊娠を防止する研究
○育児支援に関する研究

味を抱いたのが、徳之島の母子連絡会の活動。助産師と保健師が連携して地域の妊産婦と赤ちゃんの産前産後を見守るシステムは、他の離島やへき地のモデルになると確信した。「住み慣れた場所で産みたい人にとって、理想的な見守りシステム。大きいまちでは逆に実現は難しいと思いますが、島の規模にはちょうどいい支援体制です。本来ならどのまちにも作ってほしいシステムなのですが、あまり他所にはないんです」

地域での出産・母子保健に貢献する人材育成へ

離島での調査活動を通じて吉留先生は、地域の周産期医療や母子保健活動の核となるリーダーを育成する必要性を痛感した。だが、従来の学部教育では時間が限られており、地域活動に関する実践的教育を行う余地がなかった。２００９年、保健師助産師看護師法の改正によって保健師、助産師とも

に修業期間が半年から1年に延長されたこともあり、大学院創設の好機が訪れた。そして全学あげての取り組みが実り、２０１４年度、母性・小児看護学講座に母性小児コースと助産学コースから成る大学院が設置された。現在、1期生と2期生9名が徳之島での地域実習や国内外の学会参加などを重ね、学びを深めている。来春卒業する第1期生の1人、盛満あゆみさんは徳之島の病院に就職予定だ。「看護師として8年勤務した経験があったのですが、地域での実習に参加して、病院内だけではなく地域、暮らしのなかで妊産婦さんをケアすることの大切さを実感しました。大学院での学びを地域で生かしたいです」と離島での活動に意欲を燃やしている。「将来的には、現場で働く人たちが、自らの言葉で社会に提言を行ってほしい」というのが吉留先生の思い。先生が社会にまいた種子が、いま芽吹きの時期を迎えている。

鹿児島大学COC事業教育研究成果報告会を開催

かごしまCOCセンターは、7月14日に鹿児島大学COC事業教育研究成果報告会を農学部・共同獣医学部共通棟101号教室にて行い50人の参加がありました。

2014年度文部科学省　地(知)の拠点整備事業に採択された「火山と島嶼を有する鹿児島の地域再生プログラム」事業において、本学の教育、研究、社会貢献活動をより地域を志向するものとするために学内公募により採択された21課題の内、10課題の発表が行われました。

最初に住吉文夫研究担当理事から「鹿児島大学では、沢山の先生方が長年地域貢献型の研究をされております。このようにCOC事業が採択されたことによって、大学として地域に貢献する、という姿勢が浸透し、出席された方々にも地域貢献について考えて頂く機会になればと思います」と挨拶がありました。続いて、それぞれの課題の研究者から発表があり、本県の地域特色に関した幅広い分野からの成果報告となりました。残る11課題については、11月開催の報告会での発表を予定しています。

↑報告会の様子

【10課題「題目」と発表者(所属)】

「鹿児島のバイオマスエネルギー利用について」
寺岡行雄 教授(農学部)

「しらす斜面・盛土の浸透性破壊に対する安定性に関する研究」
酒匂一成 准教授(理工学研究科)

「肝属川流域での水害・土砂災害防除のための水文観測」
齋田倫範 准教授(理工学研究科)

「鹿児島県における大規模災害時の歯科医療体制の現状把握ならびに鹿児島県と鹿児島大学の協力体制の構築・強化の検討」
菊地聖史 教授(医歯学総合研究科)

「大隅半島過疎集落における野生動物による農業被害：人と野生動物のこれからのつきあい方を考える」
藤田志歩 准教授(共同獣医学部)

「ヨロンマラソンのインターネットライブ中継」
升屋正人 教授(学術情報基盤センター)

「与論町における映画「めがね」によるロケ地観光の実態調査：鹿児島県内のロケ地観光開発のモデル化事業」
萩野　誠 教授(法文学部)

「鹿児島地域機能性食材を活用した食と健康に関する研究」
候　德興 教授(農学部)

「喜界島産潤命草の抗癌予防食品としての新規開発」
河原康一 講師(医歯学総合研究科)

「奄美大島におけるトケイソウ東アジアウイルス(EAPV)の集団遺伝学的解析」
岩井　久 教授(農学部)

教育学部第二講義棟(アクティブラーニングプラザ)が完成

7月17日、昨年3月から改修工事を行っていた教育学部第二講義棟の完成に伴う落成式が行われ、教職員、学生、来賓など約60人が出席しました。

式では、初めに前田芳實学長から挨拶があり、「学生を最も大切にし、素晴らしい学習環境で質の高い教育を行い、向上心を持って困難に果敢に挑戦する若者を育成する大学として、第二講義棟の完成により、学生のグループディスカッション、ディベート、グループワーク等のアクティブラーニングに一層の取り組みが可能となりました」と期待が述べられました。続いて、前田学長、土田理教育学部長、利用者を代表して大学院生の黒岩悠さんによるテープカット、その後、施設見学が行われ、光溢れるラウンジや階段、3階テラスからの郡元キャンパスの眺望に出席者から感嘆の声があがりました。

↑テープカットを行う黒岩さん、前田学長、土田教育学部長

↑第二講義棟(通称：アクティブラーニングプラザ)外観

香港かごしまクラブとインターンシップ派遣の覚書を締結

鹿児島大学では、香港かごしまクラブの支援で実施される香港でのインターンシップに8月24日から5日間、農学部・水産学部連携国際食料資源学特別コースの学生6人と教員1人を派遣しました。

本インターンシップへの派遣に当たり、7月29日に香港かごしまクラブの溝口鉄一郎会長をお迎えし、事務局にて友好大使委嘱式を行いました。

初めに前田芳實学長より「このたびは鹿児島大学の教育へのご協力とご支援を戴く事になり、心から感謝と御礼を申し上げます。香港は、様々な面でアジアの中心的位置を占めていますことから、そういったフィールドで学ぶ機会を得る事は大変大きな意味を有するものであります。本学の学生が、この経験を足がかりにして、グローバルに活躍する人材に成長していくことを期待しています」と感謝の意が述べられた後、溝口会長に委嘱状が授与されました。

その後、農学部・共同獣医学部共通棟に場所を移し、前田学長、松岡達郎水産学部長、岩井久農学部長らが列席のもと、インターンシップに関する覚書に調印し、派遣学生らと溝口会長との昼食会が催されました。

↑前田学長から委嘱状を手渡される溝口会長

↑調印書を手にする松岡水産学部長、溝口会長

熱帯水産学国際連携プログラムに基づいた大学院水産学研究科サマーセッションの開講式を実施

大学院水産学研究科では、東南アジアの4大学と共に昨年8月に設立した高等教育国際協力組織である「熱帯水産学国際連携プログラム」に基づき、8月24日から9月30日までの5週間、2015年度水産学研究科サマーセッションを開講し、8月22日に開講式を水産学部で開催しました。開講式には東南アジアの構成校から来学した14人を含む総勢約50人が出席し、各校の学生の代表が挨拶と展望について述べました。

本プログラムは、鹿児島大学水産学研究科が主唱し、カセサート大学（タイ）、フィリピン大学（フィリピン）、サムラトランギ大学（インドネシア）、トレンガヌ大学（マレーシア）の各水産学系研究科（修士課程）が連携して一つのカリキュラムを形成し、プログラムに登録した学生が構成大学で自由に学修し単位を取得できるようにした制度で、2年間の準備・協議期間の後、昨年8月に最終合意に達し、本年度より学生の登録を開始したもので、多国の大学がカリキュラムを共有し国際共同教育を進める、アジアでは初めての取り組みです。

本プログラムの特色は、グローバル化する国内外の産業社会で活躍できる人材を育成することを目的とするとともに、互いに特色と強みのある科目を提供しあうことで、単一大学では不可能な魅力ある教育を提供する、アジアの水産系高等教育の拠点の形成を目指しています。カリキュラムの統一に加えて、教員資格や単位の認定に係る規則を共通化するとともに、構成校代表者による運営協議会を設け、質の高い教育を保証しています。

来学した学生は、サマーセッションで提供する6科目の実験・講義科目のうち4科目を選択して履修するとともに、各自の受入れ教員の研究室で専門分野の調査・実験手法に関する実習教育、練習船を利用した海上実習を受けました。なお、サマーセッションの期間の授業等はすべて英語で行われました。

↑開講式出席者一同

鹿児島大学海音寺潮五郎記念東京学生宿泊施設が開所

鹿児島大学学生の首都圏における教育・研究活動等（就職活動・課外活動等）の宿泊拠点となる「海音寺潮五郎記念東京学生宿泊施設」を東京都世田谷区内に開所することになり、7月30日に看板上掲式を挙行し、8月3日から運用を開始しました。

本施設は、鹿児島県出身の直木賞受賞作家　海音寺潮五郎氏の旧記念館を、2012年度に本学が寄附受けした後、施設の活用方法等について学内で検討を行った結果、前述の用途・目的での運用が決定されたものであり、地上2階建て、建物延面積は389㎡、宿泊室は全5室（4人部屋4室、1人部屋1室）で収容人員は17人、その他共用のシャワー設備等が整備されています。また、敷地内の庭園には海音寺氏の石碑などがあります。

既に運用中の東京リエゾンオフィス（本学の首都圏における事務所機能）とともに、首都圏での学生の活動拠点並びに宿泊施設として利用されることにより、教育研究効果が大いに高まることが期待されます。

↑看板前にて清原貞夫理事、内山修一学生部長

↑施設外観

林業親方、巣立つ。「林業生産専門技術者」養成プログラムの修了式を実施

10月9日、かごしまルネッサンスアカデミー履修証明プログラム「2015年度 高度林業生産システムを実現する「林業生産専門技術者」養成プログラム」が最終日を迎え、修了式を行いました。

式には受講生11人が出席。前田芳實学長と住吉文夫研究担当理事からの祝辞と、西野吉彦演習林林長から修了証書が授与されました。開講から9年目にして受講生の総数は130人を超え、九州の林業従事者のおよそ50人に一人が本講座から巣立ったことになります。

本講座では、林業現場の最前線に従事するプロの方々を対象とし、『新しい時代の林業親方をつくる』と銘打ち、①木材生産の依頼に対し適正な生産システムによる現場管理ができる、②壊れにくく効率の良い作業路網の作設ができる、③流通に通じ、市場や需要に応じた対応ができるという3つの教育目標を掲げ、林業組織の中核的人材である素材生産業のリーダーを育成しています。

本学では今後も、人的資源・ネットワークを活かして、日本の森林・林業を最前線で支える人材の実践力育成に取り組みます。

↑現場での実習の様子

『鹿大「進取の精神」支援基金』へのご寄附のお願い

鹿児島大学は、人材育成及びイノベーション機能の更なる強化に取り組むため、広く学内外の皆様に、学生・留学生支援、海外研修支援、研究支援及び社会連携活動支援等を目的とした鹿大「進取の精神」支援基金への寄附金のご協力をお願いしております。

つきましては、何卒、この趣旨にご賛同いただける皆様のご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

お問い合わせ先　鹿児島大学学長戦略室　TEL：099-285-3101　FAX：099-285-7034
E-mail：s-kikin@kuas.kagoshima-u.ac.jp
基金ホームページ：https://www.kagoshima-u.ac.jp/kifukin/

進め！鹿大生 STUDENT INTERVIEW

2014年度進取の精神チャレンジプログラム　採択プログラム
【AIRA Peoples Collection】
プロジェクトリーダー　山下（やましたけい）慶さん
（教育学部生涯教育総合課程　地域社会教育専修4年生）

大学生の視点とセンスを生かして、地域に新しい風を！
～交流によって地域の課題に取り組むSML3.0の活動～

地域社会教育を専攻する山下さんと吾平町との出会いは昨春のこと。吾平町麓町内会からの「大学生の視点とセンスをまちづくりに取り入れたい」という要望がきっかけでした。早速クラスの仲間と共に「SML3.0（Student Meets Local 3.0）」を立ち上げ、吾平町へ通いはじめました。

最初に提案したのが、ファッションショー「AIRA Peoples Collection」。地域の女性が元気になってほしい、との思いから発想した企画ですが、当初は町民の中に戸惑いも。ですが、準備を一緒に進める中で町民の悩みや課題を直に聞くことができ、活動の方向性も見えてきました。高齢者を訪ね歩き地元を再発見する活動や、中高生を対象とした出張進路相談など多岐にわたる活動につながっています。「ボランティアなど興味もなく授業でもよく居眠りしていた私ですが（笑）、活動によって育てられました」。いま活動は後輩に引き継がれ、映像による地域史の記録を保存する活動へと深化しています。

座右の銘

「いつも全力投球」

いつも考えているのは、常に全力投球ということと、人との縁が一番の宝ということです。活動を通じてできた地域との縁、一緒に活動してくれる仲間との縁、そして私を信頼して活動に連れ出してくださる担当教員の金子先生との師弟関係を尊重し、期待に応えたいと思っています。だから、いつも全力投球っていうことになります。（笑）

Vol.02

鹿児島大学附属図書館

中央図書館

各学部に分散していた蔵書等を一元的に管理、運用するために中央図書館が開館したのがちょうど50年前。以来、中央図書館・桜ヶ丘分館及び水産学部分館の3館が鹿児島大学附属図書館として運用されています。現在、蔵書数は128万余冊。近年は電子ジャーナルや文献データベースなど電子的情報サービスも充実しています。また図書館を「学びの場」として提供するサービスとして、グループ学習室やアメニティルームも充実。さっつんと一緒に写っているのは職員と青いベストを着た図書館サポーターの学生たち。オススメ図書を集めたり、書評を手書きしたり…学生目線の図書サービスも進化しつつあります。一般にも開放されているので、気軽にご利用を。

今号の表紙「高隈演習林のスダ爺さん」

垂水市の山中にある農学部の高隈演習林には、シイ、カシ、タブ等を中心とした常緑広葉樹(いわゆる照葉樹)の森が広がっています。中でも一般向け見学コースに立つ推定300 ～ 400歳のスダジイ(ブナ科)の巨木は風格があり、親しみを込めて学生たちから「スダ爺さん」と呼ばれています。

この地域の天然林(二次林)に残る巨木は、ほとんどがスダジイです。伐採を逃れた理由は、曲がりくねった形状から神木として崇められたためかもしれませんし、木材として使い物にならなかったためかもしれません。

圧倒的な存在感を持ち、他の生き物たちをやさしく育むスダ爺さんは、森の中でとても重要な役割を果たしています。

●編集・発行／鹿児島大学広報センター
〒890-8580 鹿児島市郡元一丁目 21 番 24 号　TEL: 099-285-7035　FAX: 099-285-3854　E-mail: sbunsho@kuas.kagoshima-u.ac.jp

2015 年 11 月発行